

従業員の皆さんへ

がん対策のススメ 2019

Dr.中川のがん通信 vol.7

今年も行こう
がん検診

社員とその家族のために
会社が始めるがん対策

日本は2人に1人が“がん”になるがん大国です。しかし、その6割が治る時代でもあります。

あなたの大切なご家庭や職場のみなさんとともに、がんについて学んでいきましょう！

【症状を出しにくいがん。私のがん体験を参考に。】

昨年の10月末に、「がんの時代」(海竜社)という本を出版しましたが、その二か月後に、膀胱がんの「内視鏡切除」を受けました。「自己エコー検査」で、自分で見つけました。



自己超音波検査の様子(再現画像)

アルバイト先の病院に超音波検査装置があり、自身で膀胱のエコー検査を行って、腫瘍を発見したのです。青天の霹靂でした。

東大医学部の先輩の病院で、2年ほど前に肝臓に脂肪が貯まる脂肪肝を自分で発見して以来、毎月エコー検査を自分でしてきました。

昨年、9月ごろから膀胱の左側の壁が多少厚く見えていました。そこで、先月は尿を貯めた上で入念にチェックしてみました。すると、左の尿管が膀胱に開口する「尿管口」の近くに15ミリくらいの腫瘍ができていました。

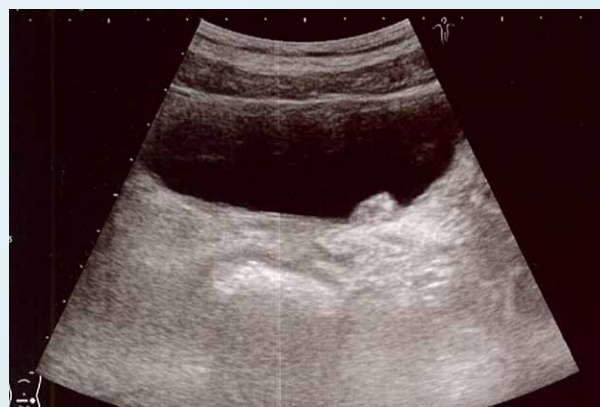
携帯電話で検査結果の写真を取り、後輩の泌尿器科医にメールで送信すると、膀胱がんの可能性

が大と返事が来ました。翌日、同じ医師に内視鏡検査をお願いし、膀胱がんがほぼ確定しました。

日本人男性の3人に2人が、がんになる時代ですから、「がんになることを前提にした人生設計が必要」などと発言してきました。しかし、たばこは吸いませんし、運動は毎日行っていて、体重も若い頃のままです。正直、まさか自分が罹患するとは思っていませんでした。

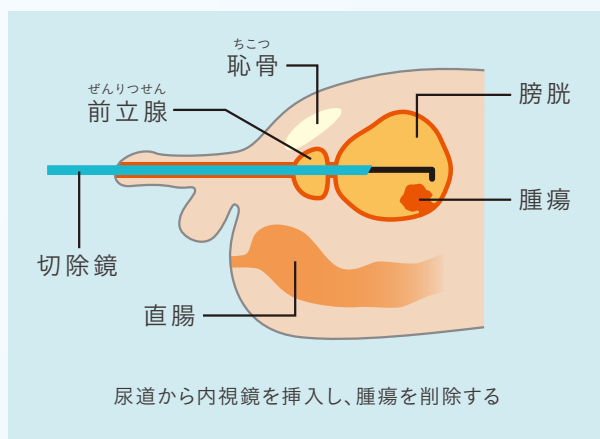
下半身の麻酔でしたから、電気メスによる切除の様子もモニターで見ることができました。幸い、40分という短時間で完全に切りきれました。

膀胱がんは1万人に1人がかかる比較的めずらしいがんで、60歳以降の男性に多く見られます。危険因子としてはっきりしているのは、工場で使う特定の化学物質を除けば喫煙だけです。男性の膀胱がんの50%以上、女性でも30%程度は喫煙のために発生するといわれます。



中川先生ご自身で発見された膀胱がん

がんは臓器のもっとも表面の上皮から発生して、外側に向かって広がっていきます。私の場合、「表在性がん」でしたから、内視鏡切除が可能でした。しかし、もし発見が遅れて、膀胱の筋肉の層にまでがん細胞が広がっていたとすると、全摘が必要となります。その場合、小腸の一部を切り取った上でお腹に



経尿道的膀胱腫瘍切除術

人工膀胱を作る「回腸導管」が一般的になります。

がんは症状を出しにくい病気です。まして、早期では、ほとんどの場合、何も感じません。膀胱がんと同じですが、痛みを伴わない血尿が早期発見のサインとなります。しかし、私の場合、顕微鏡で分かるような血尿もありませんでした。脂肪肝のチェックのために自分で行っていたエコー検査で偶然に発見できたのは本当にラッキーでした。

膀胱がんの「自己エコー検査」は別としても、乳がんのセルフチェックなどはだれでも簡単にできるはずです。しかし、ある調査によると、乳がん経験のない女性の79%が「セルフチェックで見つけられる病気」と認識しながら、実際に定期的なチェックを行っている人は7%にすぎませんでした。

日本人はもっと自分の体を大切にするべきだと思います。私の経験が少しでも参考になればと思っています。



手術中の様子



中川 恵一(がん対策推進企業アクション アドバイザリーボード議長)

東京大学医学部附属病院 放射線科准教授、厚生労働省 がん等における緩和ケアの更なる推進に関する検討会委員、文部科学省「がん教育」の在り方に関する検討会委員

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、などを経て、現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長等を歴任。著作には「がんのひみつ」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。